



あなたのそばの  
グット・ライフ かわらばん 56



# Good Life

雑誌グット・ライフ (差出人)  
神奈川県平塚市立野町39-5

We wish  
"May be your good Samaritan every night and day."

## ○ ホームページ、リニューアル中！ 4月1日公開予定

「油を売る」機会が少なくなっているのを口惜しく思い、作り始めた瓦版Ⅱスタッフの近々雑感です。  
字をおおきくしました。  
お暇な折、目通しただければ、さいわいです。

それでも……。

\* \* \*

みなさまから、電話やメールなどお気軽に相談をいただいています。その先のご要望にも応えていると自負しております。  
ご来社多数御礼。お声をかけていただけることに感謝しています。

○○ばあちゃん、変わらず散歩してるかな。○○くん自転車に乗れるようになったかな。○○ちゃん、九九言えるかな。

この十年ほど、仕事の「あそび」が少なくなっていると感じます。保険の説明が年々増えていること、コンピュータの導入がなぜか内務事務を繁多にしていることなどが、ご訪問先でゆっくりおしゃべりできていない言い訳です。

「瓦版」をお届けします。

リニューアル  
かわらばん



Face to Face, Heart to Heart  
for Your Better Life! We 'GOOD LIFE'

地べたで 足と実直 が仕事してます  
「そうだ、グット・ライフにきいてみよう！」

TEL 0463-37-1955  
e-mail : goodlife@cosmos.ocn.ne.jp

**P** あります  
お店の前で停車、  
声かけてください  
ご案内いたします

スタッフ 関野俊和 西正明 戸塚珠恵 本内博子 鈴木和子 倉品伸吾  
 クレーク 佐藤香 : 伊勢田徹

制作 [伊勢田 徹 : Bureau d'oiso]



たにしゅうぶ、あめでどう！ 1日おせさん、しゅうべいくん、7日ゆづせさん、けんくん、9日あんさん、12日のかさん、16日まおさん、21日せめさん、まるとくん、22日ごゆせさん、30日椰子さん



倉品 伸吾



◆「ググる」、聞いたことがあるかたも多いでしょう。インターネットの検索エンジンであるグーグルを使って調べたことを略して使われます(最近ではツイッターなどのSNSで調べるようになっていたため古いというむきもありますが)。

◆ ネットスラング(インターネットで使われる俗語)やJK語(女子高生用語)など、おじさんには理解に苦しむ言葉が次々と現れています。ですが「最近の若いやつは」で片づけるのもどうでしょうか。そもそも昔から日本人は略語が好きなのです。

◆ 「とりま」→「とりあえず」「了解」→「りよ」→「ちなみに」、なんだそれと思われるかもしれませんが、全国民が知っているであろうこんな言葉も略語だったので。「切手」→「切符手形」、「(乗り物の)バス」→「オムニバス」。了解を「り」なんてけしからん、なんて声が聞こえてきそうですが、秋田では「ね」が「〇〇が無い」とか「寝なさい」なんていう意味で使われるそうです(一説によれば厳しい寒さで唇がこわばるため、極力短い言葉で意思疎通を図るようになったとされています)。

◆ 直接的な表現を避けるという日本の言語文化も影響しているようです。「さよなら」→「さようならば」=「結論にいたるための接続詞」。

◆ 10年先20年先に定着している略語もあるかもしれません。はたして「タビる」なのか「な」「なな」なのか。わからないかたは「ググって」みてください。

【くらしな しんご】

あなたの身近な問題に答えるのが、私たちグット・ライフの仕事です。

年賀状には、詩を引く。新年を寿ぐにふさわしい詩の手持ちがなくなりつつある。今年には新たなスタツフの倉品君が、干支の牛にまつわる漢詩を探してきた。既訳を参考に私が細工させてもらった。

夕立があがり 野原はもやいでいる  
牧童 牛にまたがり 家路につく  
その笛の調べ 太平の楽(が)  
そうか 日頃のうれいなどいかにばかりか

最終行は「牧童は日頃の愁いなんぞ感じてないのだと私は思う」というのがもとの詩で、少々いじってみても、なまなかに少年を侮っている風が払拭されない。作者王元之(おう・げんし)は禪における、悟りへの段階をおった十牛図をこの詩に詠んだ。牧童とは、私たちの自己であり、牛は悟りへ導く私たちの仏性を示すと解される。牧童を軽んずる意図はみじんもない。そこで、言外の真意を表すに、訳にいどんでみた次第。おゆるしを願う。賀状に「愁」を印すか思案した。どうしようかとうれい、見つめた末か、突飛な思付きが浮かんできた(上代の甲乙類母音を持ちこむと厄介、脇にどけとく)。なにしろ、「う」の字からの発想なのだ。母音ではじまる単語がやたらに気になる。うかんできくる。ありがとう、あはれ、いつくしむ、いとおしい……。なんとなくア行には感情的な語がならぶ気がする。「え」は「えも言えず」など、単独で否定の意味もつことがある(英字 a, anarchy(非支配)など)。

「おゆるし」の、「お」などは感情を伴う接頭辞となる。もしや、やまとことばの母音は、単語の頭におかれるとき、あらかじめ相手の気持ちを添わせようとする機能が大きいのではないか。

歌会では、節をつけ、詠む。「はなのいろはあーうつりにけりなあーいたづらにいいい」と吟誦する私の音感だと、だからだ据わりが悪いまでだが、あの間延びした「あああ」は感情移入を誘うの仕掛けなのではないか。それに呼して、観応してきたのが、やまとことばの民なのではないのか。母音で始まる語は「これから私の気持ちを伝えるので、こころして聞いてね」とのシーニュ(表徴、いまだきなら「フラグを立てる」ということなのではないか。付足しの母音はモーラ(拍)を打つてないのではないか。

そう考えると、合点のいく現象がある。和歌の字あまり。五字のところは六字。七字が八字。平仮名の字数を数える。そうではない。歌を支持するのは、おとかずの方だろう。多くは一句に母音含み、この六字は微妙な六音、これを五拍と感ずる。捉える。歌のスタイル認識に収まっているのでオーケーなのだ。「は・な・の・い・ろ・は」で拍五つの勘定。感興の五拍(二重母音態含有の五音)という現象と考えたい。

とんちん漢が調子づくが、もうしばらく戯れ言にお付き合いを。

木・毛・背・血・手・歯……と一音一義のやまとことばは多い(木は大地の毛である。西郷信綱は喝破する)。身体を表現する身近な言葉が多い。なかでも、「背」は

好ましい。おおむかし、女性からみたパートナーを「せ」と呼んでいた。二音のハラなんぞよりセのほうが身近であったらしい。いま更なのか、私が古いのか、かなり耳に障る「主人、旦那」に比べ、格段うるわしく響く。これから復活できたら、いいさて。「うれい」のれのラ行の音は、中国語の癩律、靈ほか日常会話から隔たった感の語が多い気がする。ラ行音にキラキラを感じるとるのはいま風で、「れい/れ」はなにやら避けたいモノ(ノケ)の類の感覚。やまとことばは民は、さらに「う」を頭に重ね、忌避の肌合を強めていたのかも。あるいは直截に遠ざけようとした。私には、ウ音には距離感を設ける働きを感じる。なので、「うれい」。

色女色男、ときに愛人さんを俗に言う「いろ」は非日常の空気が漂う。やばい感じ。きつと、ろ一音だ。まえの音を引きずつての「おれのいろは」とは、なんともスリリング、蠱惑に肌、泡立つ。恋は、もともと「こ」だといひぞ。吟誦しているうちに、一音では「どうもはげしすぎるなあ、こいーにしよう」という成行きで定着したとしたなら、ほほえましい。いや、感嘆の体言止め、いま風なら「花!」とびつくりマークで表すところを「はな」と声にする時代があったのだから、「こ」だけではどうにも心おさまらず、熱烈に「こい」したか? どちらでもよい。いずれ、恋に背と色がえんえん続く、これ、やまとの文芸史。

中国語では、詩はごく稀な古詩のほか、恋を詠まない。(と)